

# 「学力」に対する文部科学省の公式見解

## - 3つの学力調査から -

学研教育総研が「ヨミウリウィークリー」と行った共同調査で、保護者の83%が「ゆとり教育で学力が低下した」と考えていることが明らかになった。ところで、これだけ「学力低下」の批判を受けている当の文部科学省は、学力をどのようにみているのか？ それは、中央教育審議会において、次の3つの学力調査の分析から明らかになっている。今月はその分析のポイントを整理してみる。

### 1. 3つの学力調査

3つの学力調査とは、学習到達度調査（PISA2003）と国際数学・理科教育動向調査（TIMSS2003）、それに平成15年度小中学校教育課程実施状況調査のことである。（表1）

この中でTIMSS2003と教育課程実施状況調査は従来型の知識を測る調査であり、PISA2003はいわゆる「生きる力」を測る新しい調査である。

結論から言うと、文部科学省の現時点における立場は、前者は、国際的には依然として上位にあり、国内的にも回復傾向にある。また後者のなかでとくに「読解力」については国際的に決して高いレベルにあるとはいえないというものである。

少し詳しく見ていこう。

(表1) PISA調査とTIMSS調査及び教育課程実施状況調査の概要

	PISA2003	TIMSS2003	平成15年度小・中学校 教育課程実施状況調査
実施主体	経済協力開発機構(OECD)1960年設立の政府間機関。30カ国	国際教育到達度評価学会(IEA)1960年設立の国際学術研究団体。60カ国/地域の教育研究機関より構成	文部科学省
参加国	41カ国/地域(非加盟国11カ国/地域)	小学校4年生:25カ国/地域 中学校2年生:46カ国/地域	国内
調査実施時期	2003年7月	2003年2月	2004年1~2月
調査対象	高校1年生 (約4700人)	小学校4年生(約4500人) 中学校2年生(約4900人)	小学校5年生~中学校2年生の各学年(合わせて約45万人)
調査項目	読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシー、問題解決能力	算数・数学、理科	国語、社会、算数・数学、理科、英語(中学のみ)
調査内容	知識や技能等を実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかを評価(記述式が中心)	学校のカリキュラムで学んだ知識や技能等がどの程度習得されているかを評価(選択肢が中心)	学習指導要領(1998年告示)の目標・内容に照らした児童生徒の学習状況の把握

## 2. TIMSS2003

日本の小・中学生の学力は、算数、数学、理科とも国際的にみて上位にある。(表2)

しかし、シンガポール、韓国、台湾、香港といったアジアの国々が新規に参入したり、大幅に順位を上げたりするたびに、日本は少しずつ順位を下げている。(表3)

トップとの点数差も、中学の数学では第3回追調査で25点だったのが、第4回では35点に広がった。同じく小学理科では0から22点に、中学理科では19点から26点と広がった。したがって相対的には低下傾向にある。

(表2) TIMSS2003の成績

算数・数学の成績

	小学校	中学校
第1回・1964年	実施していない	2位 / 12国
第2回・1981年	実施していない	1位 / 20国
第3回・1995年	3位 / 26国	3位 / 41国
第3回追調査・1999年	実施していない	5位 / 38国
第4回・2003年	3位 / 25国	5位 / 46国

理科

	小学校	中学校
第1回・1970年	1位 / 16国	1位 / 18国
第2回・1983年	1位 / 19国	2位 / 26国
第3回・1995年	2位 / 26国	3位 / 41国
第3回追調査・1999年	実施していない	4位 / 38国
第4回・2003年	3位 / 25国	6位 / 46国

(表3) TIMSS調査 順位と得点の変遷

中学の数学

順位	第1回 (平均総得点)	第2回 (平均正答率、%)	第3回 (平均得点)	第3回追調査 (平均得点)	第4回 (平均得点)
1	イスラエル(323)	日本(623)	シンガポール(643)	シンガポール(604)	シンガポール(605)
2	日本(312)	オランダ(574)	韓国(607)	韓国(587)	韓国(589)
3	ベルギー(304)	ハンガリー(563)	日本(605)	台湾(585)	香港(586)
4	西ドイツ(255)	フランス(526)	香港(588)	香港(582)	台湾(585)
5	イギリス(238)	ベルギー・ フラマン語圏(524)	ベルギー・ フラマン語圏(565)	日本(579)	日本(570)

## 小学の理科

順位	第1回 (平均総得点)	第2回 (平均正答率、%)	第3回 (平均得点)	第3回追調査 (平均得点)	第4回 (平均得点)
1	日本(217)	日本(643)	韓国(597)	日本(553)	シンガポール(565)
2	スウェーデン(183)	韓国(640)	日本(574)	アメリカ(542)	台湾(551)
3	ベルギー・FL(179)	フィンランド(638)	アメリカ(565)	オランダ(530)	日本(543)
4	アメリカ(177)	スウェーデン(61.1)	オーストリア(565)	イギリス(528)	香港(542)
5	フィンランド(175)	カナダ・仏語圏(60.4)	オーストラリア(562)	シンガポール(523)	イギリス(540)

## 中学の理科

順位	第1回 (平均総得点)	第2回 (平均正答率、%)	第3回 (平均得点)	第3回追調査 (平均得点)	第4回 (平均得点)
1	日本(312)	ハンガリー(72.2)	シンガポール(607)	台湾(569)	シンガポール(578)
2	ハンガリー(29.1)	日本(67.3)	チェコ(574)	シンガポール(568)	台湾(571)
3	オーストラリア(24.6)	オランダ(65.8)	日本(571)	ハンガリー(552)	韓国(558)
4	ニュージーランド(24.2)	カナダ・英語(61.9)	韓国(565)	日本(550)	香港(556)
5	西ドイツ(23.7)	イスラエル(61.9)	ブルガリア(565)	韓国(549)	日本(552)

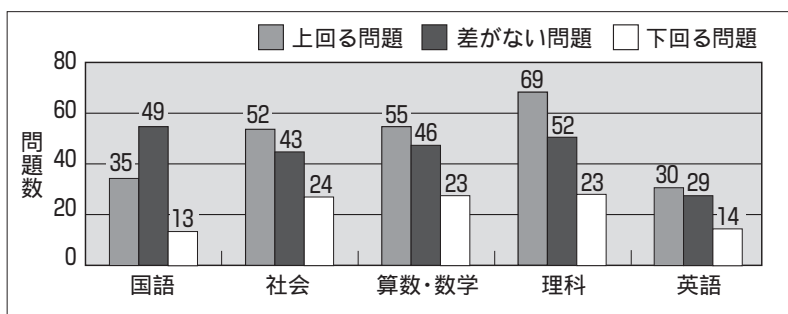
## 3. 平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査

前回調査(2002年1～2月)との同一問題を比較し、正答率の経年変化をみるとつぎのようになる。「有意に上回る」問題数は全体の約43%、「有意に差がない」問題数は約39%、「有意に下回る」問題数は約17%だった。つまり、前回調査より正答率は格段に上昇したということである。個々の教科については(図1)を参照のこと。

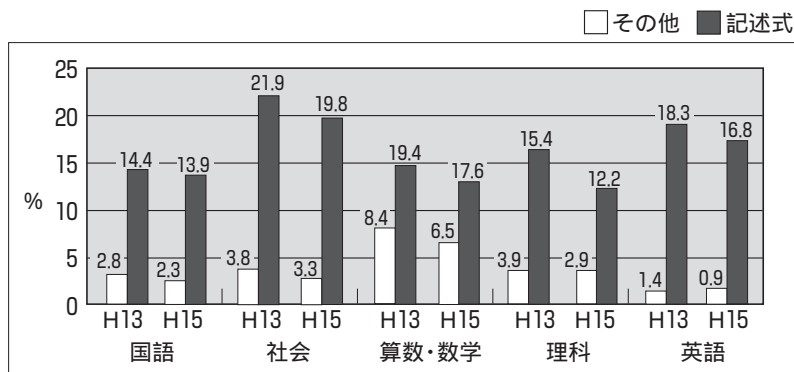
さらに前回調査との同一問題で、「記述式」の問題と「その他」の問題に分類して、「正答率(平均)」と「無解答率(平均)」の経年変化を比較してみる。すると大半の教科で、「正

答率」は上回り、「無解答率」は下がっている。しかし、国語の「記述式」だけは正答率が下がっている。(図2、図3)

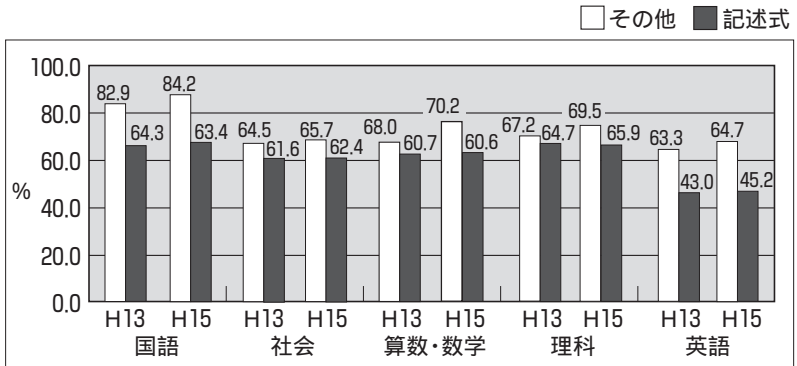
(図1) 前回調査との同一問題における正答率の比較(教科別)



(図2) 前回調査との同一問題における無解答率の比較



( 図 3 ) 前回調査との同一問題における正答率の比較



#### 4 . PISA2003

いわゆる「生きる力」を見るPISA調査においても日本の高1生の学力は、全体として国際的に上位にある。つまり、数学的リテラシー（活用能力）と科学的リテラシー、問題解決能力は「1位グループ」に括られる。（表4）しかし、読解力だけは2位グループであった。

ちなみに、前回2000年の調査では、数学的リテラシー1位、科学リテラシー2位とやはり1位グループであったのに対し、総合読解力は8位で2位グループであった。（問題解決能力は2003年調査から実施）

このことから、「読解力など低下傾向にあり、世界トップレベルとは言えない状況」と文科省はまとめている。

(表4) PISA2003における平均得点の国際比較

順位	数学的リテラシー		読解力		科学的リテラシー		問題解決能力	
	国名	得点	国名	得点	国名	得点	国名	得点
1	香港	550	フィンランド	543	フィンランド	548	韓国	550
2	フィンランド	544	韓国	534	日本	548	香港	548
3	韓国	542	カナダ	528	香港	539	フィンランド	548
4	オランダ	538	オーストラリア	525	韓国	538	日本	547
5	リヒテンシュタイン	536	リヒテンシュタイン	525	リヒテンシュタイン	525	ニュージーランド	533
6	日本	534	ニュージーランド	522	オーストラリア	525	マカオ	532
7	カナダ	532	アイルランド	515	マカオ	525	オーストラリア	530
8	ベルギー	529	スウェーデン	514	オランダ	524	リヒテンシュタイン	529
9	マカオ	527	オランダ	513	チェコ	523	カナダ	529
10	スイス	527	香港	510	ニュージーランド	521	ベルギー	525
			⋮					
			14位 日本	498				

### 5. 学習への関心・意欲・態度の調査

これら3つの調査では、学力そのものの調査だけでなく、学力への関心・意欲・態度も調査している。

#### 1) 学習への関心・意欲

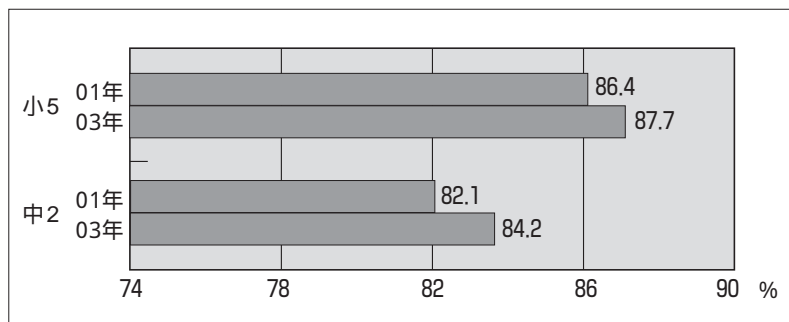
まず、国際調査である。

「数学で学ぶ内容に興味がある」生徒は全体の32.5%、OECD平均の53.1%を下回った。(PISA2003)

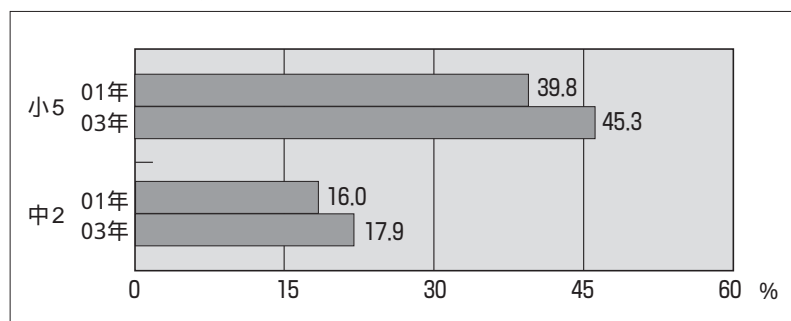
また、「数学の勉強は楽しいと思う」生徒の割合は39% (国際平均65%)、「理科の勉強は楽しいと思う」生徒の割合は59% (同77%) とともに国際平均を下回った。さらに、「数学が得意」な生徒は39% (同54%)、「理科が得意」な生徒は49% (同54%)、いずれも国際平均を下回った。(TIMSS2003)

次に、国内調査（教育課程実施状況調査）についてみる。  
「勉強が大切だ」「勉強が好きだ」に「そう思う」「どちらかといえばそう思う」生徒の割合は、増加傾向にある。（図4、図5）  
また、ペーパーテストの得点が高い傾向にある。（図6）  
「授業が分かる」に「そう思う」「だいたい分かる」生徒の割合も増加傾向にある。これらは、2002年1月に「学びのすすめ」が出されて以来、各学校で学力向上に関する様々な取り組みが行われた成果のあらわれである。というのが文科省の見解である。

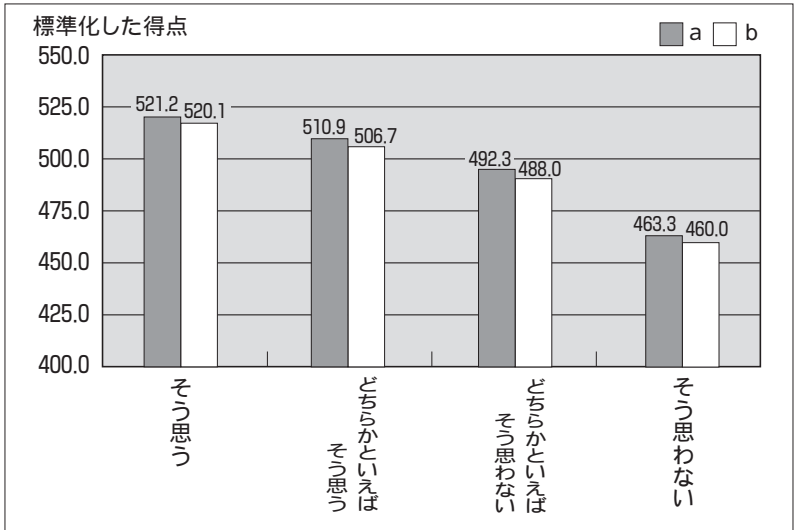
(図4) 「勉強は大切だ」  
そう思う、どちらかといえばそう思う



(図5) 「勉強は好きだ」  
そう思う、どちらかといえばそう思う



(図6) 「勉強は好きだ」と答えた小5国語の得点(a)  
「勉強は大切だ」と答えた中2社会の得点(b)



## 2) 学習への態度

国際調査では、学校以外の勉強時間は日本の子どもが週に6.5時間であるのに対し、OECD平均では週に8.9時間と、2.4時間もの開きがあった。(PISA2003)

またTIMSS2003では、学校外での時間の過ごし方としてつぎのような結果が出た。

1日の宿題をする時間 日本1.0時間 国際平均1.7時間

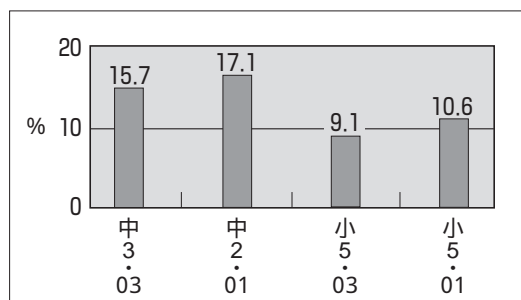
テレビやビデオを見る時間 日本2.7時間 国際平均1.9時間

家の手伝いをする 日本0.6時間 国際平均1.3時間

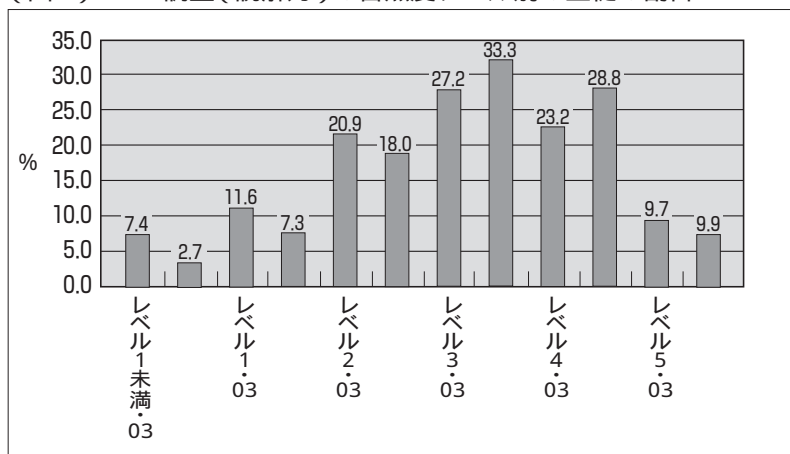
このように日本の子どもは、国際的に見て宿題をする時間が短い一方、テレビやビデオを見る時間が長く、また家の手伝いをする時間は短いのである。

また文科省は、(図8)のデータから「平日の学校以外に全く、ほとんど勉強しない」子は減少傾向にある、と分析する。

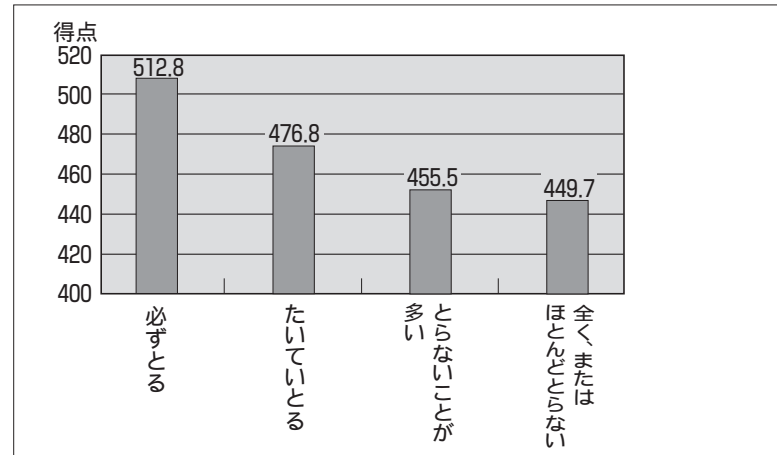
(図8)「平日における学校の授業以外の学習時間」  
全く、ほとんど勉強しない



(図9) PISA調査(読解力)の習熟度レベル別の生徒の割合



(図10) 学校に行く前に朝食をとりますか



### 3) 学力の2極化傾向

学習意欲の低下とともに、日本の子どもの大きな問題は、学力の2極化である。

その一つが学力レベルである。(図9)からは、レベル1未満からレベル2までの低学力層が2000年から2003年にかけて増加している。逆にレベル3以上の高学力層が減少していることがわかる。

また(図10)からは、「朝食を必ずとる」子が、ほかのケースの子に比べても高い点数をとっていることがわかる。生活習慣が学力に大きな影響を及ぼすことは、とくに陰山英男先生の主張(「早寝・早起き・朝ごはん」運動)などから定説となりつつあり、国もその主張を認めている。

古川隆 < 学研教育総研 本社4階 内線8356 >